



## シリーズ！ 活躍する2017年度国際活動奨励賞受賞者 その6

なかやま よしひろ  
中山 善博

公益財団法人KDDI財団 国際協力部 専任課長  
yo-nakayama@kddi-foundation.or.jp  
<http://www.kddi-foundation.or.jp/>



現地の生活に根ざしたICTによる改善プロジェクトを計画・実行し、プロジェクト完了後は、関係者へ働きかけて現地による活動として継続できるよう尽力した。

### 情報通信で社会貢献したい思い —生き生きとした表情に出会ってみて—

この度は日本ITU協会賞「奨励賞」をいただき誠にありがとうございます。国際協力活動に携わってから、ベトナム・モンゴル・ミャンマー・バングラデシュ・タイにおいて、プロジェクトを実施してまいりました。日本及び各国にてご支援をいただきました関係の方々に深く感謝申し上げます。

さて、アジアの各国で国際協力活動をやってみますと、現地の方々の生き生きとした表情に触れる機会が多くあります。私たちは情報通信の世界におりますので、情報通信を駆使して、そのような機会を増やしていければと思っています。

2015年のモンゴルでのプロジェクトでは、首都ウランバートルから約1,000キロメートル離れた東部草原地帯の国境沿いのハルゴル村（Khalkhgol）へパラボラアンテナを設置し、役場・学校・診療所をWi-Fiで結び、インターネットを開通しました。これにより、行政サービスの迅速化、オンライン教材活用による児童の学力向上などに貢献することができました。ウランバートルからハルゴル村までは車で丸2日間を要します。舗装道路ではなく大草原にできた轍を進みますが、意外と深い凹凸があるところを時速100キロメートルほどの高速で走りますので、乗り心地はよくありません（車には過酷な環境ですが全く故障もせずやはり日本製はスゴイと思いました。ちなみにウランバートルで見るほとんどの車は日本製です）。パラボラアンテナ

やWi-Fi装置の設置工事後は、多くの村人が役場前広場に集まり、オープニングセレモニーが開催されました。村長・医師・先生などから喜びや期待が表明され、また、多くの児童も集まってくれて、歌の披露もありました。みなさんのうれしそうな表情などを見ておりますと、お役に立てたのかなという実感が湧いてきます。このハルゴル村はノモンハン近郊で、70年以上経っていますが、至る所に日本との戦争の記念碑が建てられています。歓迎会では、歌や踊りで盛り上がり、「北国の春」を歌わされ(?)しました（曲をご存じで、電子ピアノで伴奏してくれました）。このプロジェクトは単年でしたが、関係者と協議の結果、効果が認められ、翌年の村の予算に維持費用が盛り込まれました。

このように現地で活動し、生き生きとした表情に触れますと、改めて現地に貢献したいという思いが湧いてきます。日本の支援の丁寧さや現地への思いは誇れると思いますが、もっとスピードを上げていきたいと思っています。現地が望むもの（例えばインターネット）と日本が望むもの（社会貢献としてのアピール力やビジネス展開の可能性）のマッチングの難しさや、技術力・英語力・人脈など求められる個人の力量と組織内評価とのギャップについては課題があると思います。国際協力活動が現地の方々の助けになり、かつ、日本の組織の目標達成のきっかけづくりになるようなプロジェクトを推進していきたいと考えております。



なりきよ  
成清

よしかず  
善一

日本放送協会 名古屋放送局 技術部（送受信技術） 副部長  
narikiyo.y-eq@nhk.or.jp  
<http://www.nhk.or.jp/nagoya/>



4K・8K地上放送の取組みを共有するITU-Rレポート（BT.2343）に対して、レポート作成の提案から始まり、ブラジル主管庁と連携してリオデジャネイロでの8K地上伝送実験の結果等を逐次入力するなど、4K・8Kに係る我が国の放送技術の適切な情報提供を行い、ITUの標準化活動に大きく貢献した。

## 現在と今後の地上デジタル放送に関する国際標準化活動

この度は、日本ITU協会国際活動奨励賞という大変名誉ある賞を頂き、誠に光栄に存じます。日本ITU協会ならびにご指導いただいた関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

放送業務を担当するITU-R Study Group 6のWorking Party 6A（地上放送）に2014年から参加し、地上デジタル放送の混信保護比の勧告や、他業務との共用検討、SFN、ワイヤレスマイク、FPU（Filed Pick up Unit）、緊急警報放送、4K・8Kの伝送実験に関するレポート、研究課題の見直しなど地上デジタル放送に関して多岐にわたる文書の改訂及び策定に従事しました。その中でも特に印象深い現行の地上デジタル放送の混信保護比に関する勧告ITU-R BT.1368の改訂と、次世代の地上デジタル放送を見据えた4K・8K伝送実験に関するレポートITU-R BT.2343の作成について振り返りたいと思います。

私のITU-R標準化活動の最初の任務は勧告ITU-R BT.1368の改訂でした。改訂の発端は、2014年春会合で、南米のDVB-T2採用国であるコロンビアが希望波ISDB-T、妨害波DVB-T2の混信保護比を入力してきたことです。日本代表団は、コロンビアの実験結果に対して、日本でも同様の実験を実施し検証したいと要望し確認期間を取りました。2014年秋会合で、同一チャンネル干渉、隣接チャンネル干渉ともに日本の実験結果を基に修正する勧告改訂を

行いました。会合の場だけではなく、ISDB-Tファミリーであるブラジルにもサポートをもらいながら、コロンビアに事前説明に行くなど、水面下の交渉を行うことで課題を解決しました。最終的には、一緒に食事に行く仲になったのを覚えています。

地上デジタル放送の技術発展や将来の要求条件について検討を促すことを目的に日本が提案した4K・8Kに関する地上波野外実験に関するレポートITU-R BT.2343は、私のライフワークでもありました。2014年秋会合で日本より8K UHD TVの野外伝送実験の結果としてレポートの作成を提案したところ、フランス、スペイン、スウェーデン、イギリスの4か国からも4K UHD TV伝送実験の結果が入力され、マージした文書を作成しました。その後、2015年春会合で韓国からも伝送実験の結果が入力され反映後、初版が発行されました。また、2016年のリオ五輪中に実施したブラジル国内での8K UHD TV伝送を用いたパブリックビューイングについても、ブラジル主管庁と連携しながら日本、ブラジルの共同提案という形でレポートの改訂を行いました。

ITUの国際標準化活動を通じて、日本の放送技術が世界を牽引するとともに、世界の放送業界が発展し続けていくことを切に願っています。